タキイ品種大解剖！

ダイコン
耐病総太り編

発売50周年！

（編集部）

「耐病総太り」は1974年の発売以来、多くの方にご愛顧いただき今年で50周年を迎えることができました。発売当時とは、現在の気象条件は変化しましたが、〝品質のよさ〟と〝作りやすさ〟は変わりありません。今回はそのロングセラー品種「耐病総太り」の上作のポイントを解説いたします。

早まきは避け、複数回に分けて播種

「耐病総太り」の秋まきのスタートは、9月5日ごろ（中間地基準）としていますが、近年の高温条件を考慮すると9月10日以降（中間地基準）を目安に開始すると栽培が安定しやすくなります。

また、1週間おきに数回に分けて播種することで、良質なダイコンを長く収穫することが可能です。12月中旬以降に収穫するものは、不織布などの資材を使い葉傷みや首の凍害を防ぐことで冬期に長く品質を維持できます（図1）。11月中下旬～2月上旬ごろまで約3カ月間収穫できることは「耐病総太り」を使う醍醐味でもあります。

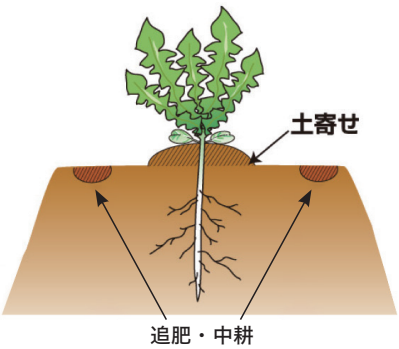
追肥主体の肥培管理と土寄せ

生育が旺盛な「耐病総太り」は、元肥を抑えて追肥主体の肥培管理を行うことがポイントです。施肥量の目安は、元肥が1㎡当たりチッソ成分で約10g、本葉5～6枚ごろ（9月10日まきで約3週間後が目安）に最終間引きを行い、1㎡当たりチッソ成分で約2～5gを追肥します。追肥後は株元に土寄せすることで、株が安定しやすく、その後の生育がスムーズに進みます（図2）。栽培条件によって葉が大きくなりすぎる場合は、元肥のチッソ成分を1～2割減らすことで初期生育を調節しましょう。

幅広い用途に向く肉質

「耐病総太り」の肉質は緻密（ちみつ）で汎用性が高く、幅広い用途に向きます。おでんなどの煮炊きでも煮崩れしにくく、歯切れがよいため漬物にも好適です。もちろんサラダにも適しており、12月中旬以降寒さが増してくると甘みが強くなります。おすすめは切り干し大根。寒干し後の色の白さと風味のよさが特長で主要産地の宮崎県でも採用されているほどです。

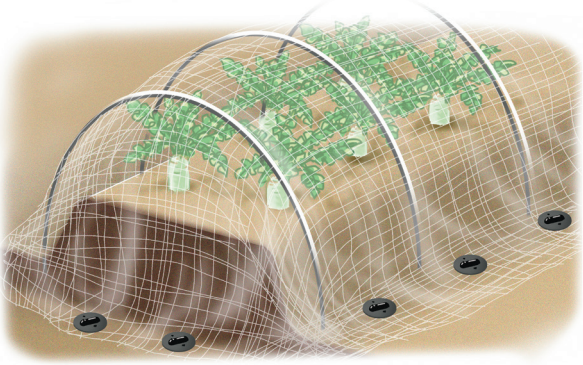
■図2　追肥・中耕・土寄せ



- 本葉5～6枚のころ、1本に間引き、畝の両肩と条間に追肥をした後、中耕する。
- 中耕は肥料と土が混ざることによる肥効の促進とかたい土の表層を砕くことによる根への酸素供給の効果があり、その後の根の順調な生育を促す。
- 水はけが悪い畑では、高畝にすることで排水性がよくなり、根が伸びやすくなる。

追肥後は写真のように、成長点が埋まらない程度に土寄せすることで株が安定する。

■図1　寒さ傷みを防止する被覆資材の利用



12月中旬以降の収穫となるものは、不織布などの資材で浮きがけまたはベタがけをすることで葉傷みや首の凍害を防ぐ。裾は杭などで飛ばないようにしておく。